「沼田市の経済活性化と未来を照らす」沼田城再建において必要なものとは？

【沼田市の歴史上のシンボル、沼田城の再建に市民の関心高まる】、昨年末、地元紙にこのような見出しが踊った。建設業界から前例のない大きな金額の寄付が相次ぎ、高校生が子ども議会で再建を問いただすなど、市民の高まりゆく熱量が各所で報じられた。しかし計画は、慎重ゆえに進展しないまま。そこで、城の再建で大成功をおさめた３自治体を取材。沼田城の未来に潜む可能性を見つめ直す。

資金調達は？建築場所は？３自治体の実例から学ぶ３つの城再建！

岡山城［岡山県岡山市］

大洲城［愛媛県大洲市］

尼崎城［兵庫県尼崎市］

市民の誇りが蘇らせた漆黒の名城

Case１. 岡山城

岡山城による年間経済波及効果は113億７千万円。入場者数は47万2,215人。観光客のうち、約78%が県外または海外からの来訪者である。観光客の交通・宿泊・飲食などによる直接効果だけでも、約70億2,300万円を生んでいる。再建の夢が、地域経済を潤す起爆剤となったが、そこまでの道のりは決して平坦ではなかった。

炎の海に沈んだ岡山城

岡山城の誕生は、戦国時代。備前で勢力を伸ばしていた武将・宇喜多直家が築き、やがて秀吉の指導のもと、宇喜多秀家が完成させた。安土城や大坂城の様式を受け継ぎ、当時最先端の建築技術を結集した傑作。漆黒に輝く天守は「烏城」と呼ばれ、威容を誇った。

岡山城の真の価値は、天守台の石垣。天守を支える土台は、類を見ない独創的な形状の不等辺五角形。築城当時の技術者たちの英知と情熱の結集である。その歴史的価値が認められ、昭和６年には国宝に指定されている。

後に城の対岸に、日本三名園の一つ「岡山後楽園」が完成すると、城と庭園が織りなす美の競演で唯一無二の景観を誇った。この美しさは永遠に続くと思われた。

ところが、昭和20年６月29日、第二次世界大戦終焉の本土決戦、激しい空爆で炎の柱が闇を赤黒く染めた。無数の焼夷弾が降りそそぎ、市民が愛してやまなかった漆黒の城は、炎の海に沈んでいったのだ。

民意を引き継いだ岡山市

岡山城焼失から15年後の昭和35年、日本は高度経済成長の波に乗り始めていたころ、岡山の人々の心には、ある思いが静かに芽吹き始めていた。もう一度、あの城を……、市民を中心に岡山城再建期成同盟会が結成され、寄付金の募集が始まった。岡山のシンボルであり、市民の心の拠り所である城。地元有志と県外在住の岡山人に呼びかけ寄付金という形で、一人ひとりの思いを集め続けた。そして、市民の祈りはついに行政を動かしたのである。その事業を岡山市が正式に引き継ぐと、再建への道筋は急速に固まっていった。

しかし、今度は別の難題が続出した。「忠実な復元」か、「未来への進化」か。理想と現実の狭間で、度重なる検討が重ねられた。議論の果てに導き出された答えは「形は守り、命は新しく」。かつての雄姿はそのままに、構造は安全面を考慮して鉄筋コンクリート造とした。観光機能を考慮し、動線の確保や展望性を優先した改変も加えられた。伝統と革新の融合である。

ライトアップされる岡山城、夜間観光にも効果を発揮している

更なるリニューアルで夢の経済効果と未来への飛翔

昭和41年、再建の鐘が鳴り響いた。岡山の澄んだ空に陽光を浴びて輝く黒き天守。市民の誇り「烏城」が帰ってきたのである。あの日、焼け落ちた城が再びそびえ立つ姿は、まさにまちの復興そのもの。失われたはずの「誇り」が、時を経て再び立ち上がったのである。

岡山市の挑戦は終わらない。令和4年。老朽化、耐震性の課題、観光ニーズの変化により新たな時代の城を目指して、再びリニューアル工事に乗り出した。掲げたテーマは「歴史を伝える城、集う城」。投じられた改修費用は約18億円。

新たな城では、さまざまな誘客促進事業が展開された。春・夏・秋にライトアップする「烏城灯源郷」、城郭イベント「集え！岡山城」、節分やひなまつりなどの歳時の催し。歳時を通じ、城は再び人々が集う場となった。城を単なる歴史遺産としてあがめるだけに終わらない、生きた文化の拠点に作り上げたのである。

リニューアル後の1年間、効果は驚くべきものであった。入場者数は過去最多となる約47万2215人。観光客のうち、約78％が県外または海外からの来訪者である。経済波及効果は、およそ113億7000万円。観光客の交通・宿泊・飲食などによる直接効果だけでも、約70億2300万円を生んでいる。再建の夢が、地域経済を潤す起爆剤となったのである。

これらの効果は一過性のものではなかった。2年目も来訪者は、約43万8327人と過去二番目の高水準を維持。岡山城は、確かな観光資源として地域経済を支えている。

このような成功で機運が高まり、令和5年度から、築城主である宇喜多秀家とその父・直家の大河ドラマ化に向けた活動がスタート。署名活動、バナーフラッグやSNSでのプロモーション、城郭イベント、研究者による鼎談会、図書館での常設展示コーナー設置など、市民の誇りを醸成し、さらなる飛躍を目指す。岡山城は、市民の心をつなぎ、誇りとなって地元愛、さらなる広がりと勢いを生み出している。

城の再建を検討する沼田市と市民への岡山市からのメッセージは明確である。「市民と自治体の心が一つになれば、城は街の運命すら変える。地域の未来の鍵を握る特別な存在なのである」。岡山市の挑戦は、市民の想いが一つになった時、不可能は可能になることを確実に示してくれている。

日本初！天守でキャッスルステイ

Case2. 大洲城

肱川（ひじがわ）の清流に抱かれた城下町、愛媛県大洲市。ここで、平成16年、一つの奇跡が実現した。大洲城天守が、116年の歳月を経て復元されたのである。しかも、木造による完全復元。史実に忠実な木造復元天守としては全国初。構想から完成まで10年の歳月を要したこのプロジェクトは、まち全体を巻き込んだ「情熱のドラマ」であった。

廃城令の波にのまれ姿消す

大洲城は、鎌倉時代の武士、宇都宮豊房が築城。肱川のほとりに威風堂々とした姿を誇る4層4階の天守であった。

明治維新後、廃城令によって全国にある多くの城郭が解体。その波は大洲城にも押し寄せ、天守は取り壊された。天守なき城跡は、かつての栄華を偲ばせるだけの存在となっていた。そして、100年以上もの時が静かに流れていった。

市民の熱望を受け止めた市長のリーダーシップ

大洲城再建が動いたのは、昭和59年。市制30周年事業の一環として、鉄筋コンクリートによる復元案が浮上したのだ。しかし、財源や市民の機運不足により計画は立ち消えとなる。

それでも火種は残っていた。10年後、市制40周年を迎えた平成6年。状況は一変する。大洲市まちづくり委員会が「10年後の市制50周年に向けて天守復元を実現しよう」と声をあげたのだ。かつて検討されたコンクリートによる復元ではない。史実に基づいた木造による完全復元。市民から署名活動が起こり、商工会議所や地元企業からも「大洲の誇りを取り戻そう」という熱い要望が噴き出した。

これを真正面から受け止めたのが、当時の市長である。同年6月、市議会で再建基金条例が可決された。多くの人々の夢を乗せたプロジェクトという船はついに動き出したのだ。

逆風の中の、市長の決断

ところが、待ち受けていたのは想像を絶する苦難だった「城は無くても良い、今のままの大洲でよいのではないか？」「優先すべき公共事業があるはず」など、市民から批判の声が噴出したのだ。ここで諦めれば、先人たちの想いだけでなく、未来への希望もすべてが水の泡。市の将来も先細りになってしまう……。プロジェクトチームは、市民に対して丁寧に説明を重ねた。さらに立ちはだかったのは耐火性、排煙設備、階段規定という数々の法的課題。復元に牙をむいたのは、皮肉にも現代の建築基準法だったのだ。

大洲市のチームは有識者も含め、さまざまな案を持ち寄り、ついに決断する。「史実に忠実な復元であれば、国宝や重要文化財と同等に扱えないだろうか」。執念の交渉の末、愛媛県庁から希望通りの回答を得た。だが、それだけでは不十分だった。日本建築センターによる構造・防災性の証明、文化庁による史実忠実性の証明、と二つの関門を突破する必要があったのだ。技術者は図面を追い、研究者は文献を洗い、文化財専門家は真実を見極め、ついにその壁を突破。全国でも例を見ない純木造の史実復元天守への挑戦権をつかみ取ったのである。

行政と市民一丸となって集客イベントを実施

総工費約16億円。資金調達の壁

次いで待ち構えていた難関は、資金調達だった。総工費は、約16億円。

行政主導で進めていたが、ここで立ち上がった猛者がいる。それが、当時の商工会議所会頭を中心とした地元企業だった。大企業への寄附依頼に奔走。市民募金活動も始まり、一人ひとりの思いが積み重なって町ぐるみの支援体制が築かれていった。

市も斬新なアイデアを打ち出し、積極的に動き始めた。建築の過程そのものを「市民参加型イベント」と位置付け、市民が自らの手で「天守を建てている」という実感を共にしながら歩み始めたのだ。木曳き式では市民が実際に木材を曳き、上棟式では完成への期待に胸を膨らませた。さらに、インターネットで工事の様子を配信。全国の城ファンの心も躍らせた。次第に反対していた人々の中にも、理解と共感が広がり、その心は一つにまとまり始めた。

甦った市民の誇り。キャッスルステイで世界から

平成16年。ついに、４００年前の技術を、現代の大工が現代の木で挑むという前代未聞の工事が完了。史実に忠実に復元された姿が蘇ったのである。

開館初年度の入場者数は過去最多となる８万５９５２人。城を中心に町の観光施設を回遊できる共通券発行という市の新たな観光戦略が功を奏し、滞在時間は延長。経済効果を押し上げた。

さらに革新的なのは、天守を貸し切って宿泊できる「キャッスルステイ」。宿泊中は、さまざまなアクティビティを体験したり、地域の食材を使った料理を味わったりできる国内初の城泊体験として脚光を浴びた。メディアで大きく取り上げられ、ＳＮＳを通じて国内外に瞬く間に広まると観光客はさらに増加。コロナ禍もあったが開始から延べ62組、およそ１億円前後の収入となっている。披露される神楽や大洲藩鉄砲隊の演武は、伝統芸能の継承にも貢献している。

日本初のキャッスルステイ、一日城主となって１泊滞在できるプラン。無形文化財、伝統芸能などの貴重な体験が出来る。１グループ 120 万円から。

商工業から観光のまちへ。市民の心は誇りへと変化

年間入込客数は約５万人を維持。古民家を活用した分散型ホテル「ＮＩＰＰＯＮＩＡ　ＨＯＴＥＬ 大洲 城下町」も誕生した。インバウンド客は増加し、多言語対応が追いつかないほどという。

子どもたちは、遠足や職場体験でこの城を訪れる。故郷への愛着と地元で働く喜びは、自然に彼らの中に育まれている。数々の試練を乗り越えて再建された大洲城は、未来へと受け継がれる町の「魂」そのものとなった。

大洲市の担当者は言う。「城の再建には多くの苦労が伴い、地域住民の協力は欠かせない。しかし、完成後、城は市のシンボルとなり住民の心の拠り所となる。城を中心とした経済活性化にもつながる。沼田城の再建を心から祈る」と。

みんなに愛される城

Case3. 尼崎城

尼崎城も先述の大洲城同様、明治の廃城令で姿を消した。何度も上がっては消えていった再建を望む声。しかし、市制100 周年を目前に「創業の地に恩返しがしたい」と申し出た一人の男によって、再建の運命の歯車が動き出す。

全国でも希な完全消失の城

廃城令によって姿を消した城の中で、地表に遺構がほとんど残らない全国的にも稀な「完全消失の城」、尼崎城。再建を希望する声が上がっていたものの、その道は険しく、立ち消えの歴史が繰り返された。

市民の間にまん延していた閉塞感が打ち破られたのは、市制１００周年を翌年に控えた平成28年。家電量販店・エディオングループ（旧ミドリ電化）の創業者である安保詮氏がこう言葉を発した。「創業の地・尼崎に恩返しがしたい。天守を建て、市に寄贈したい」と。申し出たのは、なんと12億円もの私財。市はこの話を、夢のような、絶好の機会と捉えた。

再建場所の制約を越えて

再建する場所、城郭の規模、内容などが早速、議論の対象となった。本丸があった場所にはすでに文化財収蔵庫と小学校が建っている。そこで、建設場所を本丸からは数百メートル離れた西三の丸があった場所（当時は市が保有する長年未利用だった公共用地）とし、併せて公園を整備することとした。限られた面積では本丸すべてを再建できないため、天守を中心に付け櫓の一部程度とし、尼崎城の特徴である何重にも取り巻くお堀の一部も再現し当時の雰囲気を醸し出す計画を立てた。肝心の天守は、現存する史料等にできるだけ忠実に再現したいという考えを基本に、安保氏の「誰もが天守の最上階まで登れ、みんなに愛されるお城に」という思いを踏まえ、エレベーターを設置した鉄筋コンクリート造とした。

反対意見もあった。多かったのは、維持費問題。市は、天守は安保氏の寄贈、内部展示は市民寄付と国交付金で整備し、維持費は入城料を主としながら一般財源の投入は最小限にとどめるという案を提示。市民の不安を一つずつ取り除いていった。

再建に向けた動きが現実味を帯びると、市民の熱は一気に高まった。市は「尼崎城プロジェクト！みなさんのアイデアいただきます」と題し、市内をキャラバン。回を重ねるごとに、市民の機運は高まっていった。「一口城主」「一枚瓦」「桜植樹」などアイデア満載の寄付を募り、メディアで大々的に取り上げられると、この話題は県内、全国、海外へと拡がり、約２億円にものぼる寄付金が寄せられることとなった。

市民の間には「お祭り」のようなお祝いムードが漂い始めた。お城をテーマにした食べ物、お城ソング、

土産物が多く生まれ、自主的なイベントも増えていった。地元高校生の活動も活発になり、スイーツ甲子園で優勝するまでになった。
尼崎城は、再建前からすでに「まちを変える象徴」となっていたのである。

尼崎市の経済が活性！にぎわいを取り戻した城下町

平成31年3月29日、尼崎城天守閣はついに一般公開を迎えた。開館1年目の入場者数は14万5536人を記録。再建2年目からはコロナ禍で入込客数が大きく落ち込んだものの、現在は再建前を上回る水準へ回復している。完成後の人口流動を緻密に計算した再建計画も的中した。

再建場所の近くある交通機関を利用して来城することを想定し、その時に城の守りの構えを感じられるよう天守は東西反転させる形で配置し再建したのである。城の周辺に点在する歴史博物館、寺町、商店街などを周遊するイベントや観光プランが次々と生まれた。

大阪のホテルや観光施設との広域観光連携も進んだ。まち歩きイベント、謎解きゲーム、デジタルスタンプラリーなどのコンテンツも追い風となった。

変わったのは、周囲からの評価だけではない。一番は市民だ。小学生は社会見学で必ず訪れ、若い世代には芝生広場や階段スペースが憩いの場。夜にはライトアップがさらなるにぎわいを呼び込んでいる。

商工業の街から観光都市へ。城が導く新たな尼崎市

工業のまち、商業のまちとして発展を続けてきた尼崎市。尼崎城の再建は、市民の意識に「観光」という新しい視点を根付かせた。市職員にも新たなつながりや発想が生まれ、地域経済の活性化が確かな手応えとなって現れている。

尼崎城は文化財ではない。「そこを逆手にとった」と担当者。だからこそ、石垣ボルダリングや水上ステージでの薪能など、既存の枠にとらわれない挑戦ができる。

尼崎城の再建は、一人の篤志家の夢と、それに呼応した幅広い年齢層の市民の熱意、行政の協働が成し遂げた、まさに「みんなの」プロジェクトだ。尼崎城は今も将来も市民とともにあり続け、尼崎の未来を照らしていく。明るくそして力強く。

おわりに

今回取材したお城は令和にリニューアルされた城や平成に建てられた比較的新しい城だ。

今後、地方が生き残るには、独自の魅力を活かし、市外からのヒト・モノ・カネを呼び込む「域外市場への転換や流動人口の増加」が不可欠とされる。具体的には、地域資源を活用した観光・特産品振興、移住・定住の促進である。取材した3自治体に共通しているのは、商工業中心の経済から観光都市へ変革し大成功を収めている点だ。城の再建までの物語は、三者三様ではあるが、核となるものは変わらない。それは、市民の熱意とそのうねりを敏感に感じ取る行政の嗅覚、さらに決断・実行する行政のリーダーシップだ。

沼田城再建に欠かせない資金18億円（令和3年試算）においては3つの城の時には無かったクラウドファンディングや企業版ふるさと納税など現代では資金を集める手段は多い。また、今までの先人達からの寄付が1億7000万円、沼田市が腰を上げれば支援の輪は音を立てて広がり、四方八方から寄付や支援が集まり、道は必ず開けるだろう。太田市ではアリーナ建設において企業版ふるさと納税で40億円以上の寄付を獲得。行政と民間の地域共創モデルを、群馬クレインサンダーズ、太田市、オープンハウスの三位一体で築き上げた。沼田市もこのような官民一体となった共創モデルを研究し、財政出費せずに沼田城再建することを検討すべきであろう。

沼田市の2024年の出生数は160人。かつての沼田小学校1学年の児童数にも満たない数だ。学校を卒業した若い人達は前橋・高崎に就職し、そこでの出会いがあり家庭を築くパターンが増えている。少子化で地域の担い手が減ってゆく今こそ、新たな魅力ある職場の確保とふるさとへの誇りを呼び覚ます灯台が必要である。その灯台こそ城なのだ。

かつて北国を揺るがす要衝として名を馳せ、幾多の戦国武将がその旗を掲げた城、沼田城。時代を生きた人々の誇りであり、郷土の魂そのものだ。今、私たちが未来へ手渡さねばならないのは、沼田市の明るい未来であり、その大きな意味をなすものは、この誇りある沼田城に他ならない。だからこそ、城の再建が重要なのだ。これは、歴史の復元ではない。ふるさと愛を育て、未来を切り拓く突破口そのものなのである。

3市が示した不屈の挑戦を胸に刻み、もう一度問い直そう。城の再建は、間違いなく民意の醸成につながり、沼田市の経済や誇りを取り戻す旗印になる。私たち一人ひとりの熱意を、署名という確かな形に託そう。永続的な地域の再生力をつくる第一歩になるのだから。

市民の皆様へ

LINE にて【沼田城を造る会サポートクラブ】への入会（無料）と沼田城再建に向けた電子署名のご協力をお願いします。

入会・電子署名は
コチラから

LINE から沼田城を造る会の最高顧問・広島大学名誉教授三浦 正幸の沼田城図面や収支計画、再建のメリットなどの詳細情報をご覧いただけます。

お問い合わせ **沼田城を造る会 事務局**

沼田市下之町888番地 テラス沼田 2階 TEL.0278-22-1600